珍鳥ツバメチドリ（Glareola pratincola mallivarum）の出現

於 姫路市妻鹿海岸

小　林　平　一

ツバメチドリと云う鳥は一見ムクドリか又はツグミ大の鳥で色彩の目立たない中型の鳥である。その習性が丁度、海岸にいてチドリと類似し飛び方がツバメの様であるからツバメチドリと和名がつけられたものであろう。

鳥学上ではシギ類でもなければチドリ類でもなく、ツバメチドリ科と云う別科をなすものである。

この鳥は我が国に於ては甚だ稀な迷鳥で、本州及びその近辺で記録のあるのは次の通りである。

樺　太	1回		
千島、択捉島	1♂ad	(26, V, 1934)	
八丈島	1♀jev	(20, X, 1931)	
琉球、石垣島	1♂	(1, V, 1910)	
北硫黄島	1♂, 1♀ad	(19, V, 1930)	
本　州	常陸1回	相模、酒匂	1回
	山城1回	(幼期)	(1927)
	東京洲崎	1♂VIXad	23, IX, 1930)
	大阪湾	3羽(目撃)	(11, VIII, 1937)
	〃	3 ?(目撃)	(25, VII 1951)
	〃	2羽	(17, VII, 1952)
九　州	有明海岸4羽(目撃)	(1, IX, 1929)	

そして日本の近辺の蕃殖地として知られている処は、フイリツピン、台湾（台東州）、東部シベリアで、シベリアで蕃殖したものは支那を通つて南に渡る。

さてこの様な珍稀な迷鳥が近年上記の様に再々大阪湾で7月～8月に目撃せられるので迷鳥ではなく或いは関西では殆んど連年通過している旅鳥ではないかと思つて本年（1952年）姫路市妻鹿の妻鹿新田の本種の居そうなと思える地点を注意して連続的に観察していると、他のシギの渡りと共に遂にこの珍鳥は次々2回、計9羽も出現した。

勿論県下からは新記録であり且又本州からの第6番目の記録地として次に研究し得た習性と共に報告する次第である。

渡来年月日

16, VIII, 1952年, 7羽 Coll, 2, (1♂jev, 1, unsexed ad.)

7, IX, 1952年, 2羽, Coll, 2, (1♂1♀jev.s)

（発見者　大沢俊二、山口弘幸氏）

【色彩】全体（腹部、下尾筒、上尾筒を除く）ネズミ色、詳細に云うとカンラン褐色で、腹部、下尾筒、上尾筒は純白、腋毛及び下雨覆は美しい淡栗色、目から喉にかけて黒い輪があり、喉は軟皮色で幼鳥はこの部分が淡く縦線があり、嘴は黒色、基部は赤い。又幼鳥には各毛羽先端にわずか白い所がある。眼瞼は暗黄色、瞳孔は黒青色でその外部は褐黒色である。足は黒褐色、尾羽は白色であるが先端が暗褐色である。

【形態】一見、チドリ類の様に長い足を持ち、翼はツバメの様に長く、首から上はモズの様に見えて、頭は大きく、嘴は少々曲つていて何よりもグロテスクな感じはその目玉の大きさである。即ち目が頭の割合に異常に大きくてその直径が10mmにも達している。尾羽はツバメの様に先端が別れて二又している。口はアゴに深く切れ込んでいて嘴に比較して偉大な口を開く事が出来る。之は本種が飛び乍ら採食する場合好都合な為であろうが、一見して、ヨタカか又は、ブツポウソウの様な感じを受ける。

次に詳細に今回のものの測定を述べれば次表の通りである。

月　日	性	開長	全長	翼長	尾羽長	跗蹠長	嘴長
16, VIII, 1952	1♂jev	—	—	176	64	32.0	14.0
7, IX, 1952	1♂jev	530	240	168	79	35.0	13.5
〃	1♀jev	550	232	170	67	34.0	13.5
△23, IX, 1930	1♀ VIX ad	—	—	144	59	31.2	10.0
※12～30, VI, 1932	8♂♂ad.s 3♀♀ad.s	—	—	181～189 180～187	74～82 71～80	33～36 33～34	16～18 16～17

備考　※印――台湾産（山階博士）

△印――東京洲崎産（籾山氏）

（以上mm）

尚、前記、8月16日の1, unsexed ad は残念乍ら測定される迄に本種の価値を知らずして捨去られた。

上記の表で見ると今回の3羽は明らかに本年春蕃殖したと思えるもので、台湾産成鳥とは比較して跗蹠長以外がすべて測定上小さい。

又8月16日の個体は喉部や特に尾羽に管毛がありその管毛は未だ伸びつつあつた。

【習性】本種は前記の通り我が国での珍稀種であるのでその習性に関してはあまり日本の鳥学者からの報告がない。

実際に野外で観察された記録が習性と共に発表されているのは、故榎本桂樹氏の「野の鳥の思ひ出」、下村健二氏「北の鳥、南の鳥」等である。そこで今回我々の観察し得た事項について詳細に述べる事にする。

先ず本種の渡りの途中、地上に翼を休めて数日滞在する場所は余程限られている様である。即ち海岸に近く地面が半分乾いた砂地の畑の様な処で、しかも地面に草のない場所なのである。今回観察した地点も全く2回共同一箇所で附近に似た様な地点もあつたが全然見むきもせず常に一定の場所へ帰つて来た。そして本種の渡り期の特長は一群が同一地点に滞在する日数が他のシギ、チドリ類に比べて甚だ短時日で大抵2～3日間である。こんな関係で毎年我が国を通過していても見逃される結果になつていたのかも知れない。

こう云つてもやはり本種が非常な稀種である事は間違いないらしく、近年東京湾あたりでは殆んど連日の如く熱心な日米の鳥学者達が観察記録をとつているが発見されない。

さて、本種が地上に休んでいる場合、色彩が地味なので全く発見し難く、静止している姿勢は嘴の先端を少し上向にしていて、歩く姿や地上の動作はチドリと殆んど変りがなく、畑の谷やうねの上を早くチョロチョロと走り歩く。

大抵の場合人を恐れる事はなく、10m位までは近寄れるものである。

ひと度、地上から飛びたつと上昇する迄腰の純白色が美しく見え、その姿や動作はムクドリと間違う程である。飛び方は翼が長いのでアジサシの様な翼動であるが少し早い。ツバメによく似た飛方をするが遙に大形であるから一見して区別出来るが、上空では数羽がツバメの様に巴になつて飛び交い（円を画いて）時々急上昇、急降下、反転など行うので、全くブッポウソウの様に見える、（飛方、大きさ、翼の長さ、翼動等々で。）

長時間飛んだ後、地上に降下する場合、急に翼動を止めて驚く程長距離をカッソウ飛行する様は地上に下る時のジシギ類の感がある。又、上空で円を画いて飛んでいる時、ツバメやタカブシギが附近へ飛来する事があつたが、そんな場合之等を追い散らしているのを観察した。

飛んでいる時、見誤る事があると思えるのはクサシギとタカブシギであろう。之等は大きさが小さいのと翼動が早いのとで区別出来るが、我々の観察中、鳴声と飛方が似ていて距離が遠ければ間違いやすいと思つたのはタカブシギであつた。

鳴声は、地上にあつて警戒した場合、伸び上つて、（と云つてもシギ類の如く首が長くはないのでズングリした感じで上体を持ち上げる程度）〃キッ（ピッとキッの中間音）とあまり高くない声を発する。〃

そして地上から飛び上る時や、上空へ上昇しつつある時、ピーリッ、ピーキッ等に似た声を発した。

尚、飛んでいる際、遠距離か高空でない場合はツバメの様に尾羽が別れて二又になつているのが良く見られる。

【食性】本種の口は、ヨタカやブッポウソウの様に見掛けによらぬ大きい口を開く事が出来るので餌は地上でも、飛び乍らでも採る事が出来、食物は昆虫であると云われる。

我が国に於ける本種の食性の確実な報告はされていないので今回の資料を報告する。

本年7月17日、大阪湾で発見採集された1羽（幼期）は、コオイムシを多量に食しておつたと小林桂助氏は語られた。之は主として地上で採餌したものと思われるし、その場所がコオイムシの多産地であつた為であろう。

姫路市妻鹿新田のもの3羽の食性は（胃内）

A（16, Ⅷ, 1952）シオカラトンボ、完全品2及びその残さい多量

B（7, Ⅸ, 1952）イナゴの足、胴、羽、頭部及びその残さい多量、セセリチョウ科の触角、1

C（7, Ⅸ, 1952）オオチャバネセセリの完全品、1
シオカラトンボの羽、1
オオチャバネセセリ頭部、1
イナゴの歯、1

以上の通りであつた。

Aの場合は正しく飛んでいる時捕食した物が主体らしく（時間的にも）、胃袋は異常に凸出していてトンボは喉中に半分とどまつていた。この時季にはこの地には未だイナゴはあまり見られなかつた。

Bの時季には此の地にイナゴが大発生していて、之は主として地上で追い掛け廻して捕食したものであろう。

（p. 264 へ）

Fig. 11

さ20 mmに及ぶものがある。

材料は岐阜県平湯温泉附近(Aug. 27, 1942)でクマイササに着いたものを室井が採つた。

この菌核はクマイササ(タカヤマササ)の1穂中に2,3個、時に数個が着き若いものは粘液を分泌し、なめると頗る甘く、クロルリバイが群つてなめていた。

(p. 230 から)

Cはイナゴの嗉が1個胃中に有つたのみで、シオカラトンボとチャバネセセリは飛び乍ら捕食したものと考えられる。

之等から見て本種はハチ類や特別の昆虫を除いては、時季と場所によつて適応した昆虫を殆んど何んでも捕食する様に思われる。

又消化しやすい地上のクモ類も捕食しているのかも知れない。

今回の観察は以上の通りであるが、今本種の我が国に於ける渡りを上記僅少の記録から考えてみると春季、我が国に迷行するのは、関西に於ては未だ発見されていないが5月中下旬とみて差しつかえない。この場合は蕃殖地に向いつつある成鳥である。秋季の渡りは関東に於ては記録はないが関西以西では上記の通り7月中下旬より断片的に8、9月下旬に達して、この場合は幼鳥が多い。如何なる鳥類でも春季の渡りより秋季の渡りの場合が数も多く又、春季全然みられぬ珍稀種でも秋の渡りには間々出現するもので(ツルシギ等の例外はあるが)、之は蕃殖したその年の幼鳥が混ずるからである。ツバメチドリの場合でもこの様な関係で秋の渡りに比較的多く発見されるものであろう。

今仮に5月中下旬に本州を通過して6月初旬に本種が蕃殖地に到達しても、早くも7月中下旬より本州を南下し始めるのであるから、たとえそれが同一個体でないにしても本種全般から考えると其の蕃殖地にある期間は甚だ短い様である。

又従来、本種の記録が甚だ少いのは、第一にその渡りの際の一定箇所の滞在日数が他鳥類に比して遙に短時日である事、第二に地上に下りて休憩する箇所が極めて限られた場所である事と、第三に地上にあつては極めて発見し難い事等の関係である。案外連年殆んど定期的に渡りを行つていても今迄見逃されていたという可能性は大いにある。それであるから我国には極めて稀に迷行する種であるか又は年々定期的に渡りを行つている旅鳥であるか、今後数年間の連続的観察が必要であるが大阪湾の例からしても注意さえしておれば今後年々少なからず発見されるのではないかと考えられる。即ち、人家近くでも、人通りの道ばたにしても、海岸近くの一寸した砂地の畑の(農作物や草のない)中が本種の発見可能の場所である。しかし、本年度殆んど連日、塩田の中を探したが他のシギ、チドリはいても本種を発見する事は出来なかつた。

(Sept. 1952)

追記　その後本種は昨年9月10日に東京羽田に於て米人、ドクター・スミスが遂に1羽の幼鳥を発見採集したと云う報告を聞いた。